

北朝鮮情勢と今後の動向

— 北朝鮮の交渉戦術の分析と今後の展開 —

西村 金 一

(軍事・情報戦略研究所長)

はじめに

北朝鮮は昨年まで、米国ワシントンに核兵器搭載のミサイルを撃ち込む映像、ソウルへ砲撃を行って火の海にする映像を公開して恫喝した。これらは、見せかけの映像だと明確に判断できた。今年になると北朝鮮による軍事行動を伴う恫喝が相次ぎ、米朝間において、そのトップによる軍事衝突の危機を煽るような発言が続いた。だが、北朝鮮は、口先ばかりではなく、実際に火星12号と14号の発射実験を成功させ、米国本土の半分に届くことを証明して見せた。

今年の8月、グアムをミサイルで包囲攻撃するといった挑戦的な発言を行ったことから日本や韓国を巻き込んだ米朝間の緊張感が一気に高まってきた。更に北朝鮮は、日本上空を通過する実験、9月には、爆発の効率を高めたブースト型核分裂爆弾の実験を成功させ、弾道ミサイルに核兵器を搭載できるようになった。緊張感というよりも危機一歩手前の一触即発の状態、砲弾やミサイルの撃ち合いに発展しそうな瀬戸際外交から、一歩間違えれば、本格的な軍事衝突へ突き進むのかといった危機に達した。だが、米韓軍事合同演習「ウルチフリーダムガーデン」が始まった8月下旬を境に、予想に反して、両国の緊張関係はややト

ンダウンしてきた。米国と北朝鮮は、話し合いを模索する発言や軍事行動を縮小するなど、相手国を刺激し過ぎない範囲に収め、交渉への歩み寄りを見せているところもある。

もし、この米朝の一触即発の危機において、交渉を始めてしまえば、過去にたどってきた交渉の道を再び歩くような感じがしてならない。北朝鮮は、六カ国協議の約束を守らず、何度も繰り返された韓国や日本に対するテロも、「韓国の自作自演だ」と嘘をついてきた。ダンフォード米軍統合参謀本部議長も、「経済的な圧力だけでは北朝鮮の非核化が可能だとは誰も思っていない」と発言したが、1990年からずっと北朝鮮を分析してきた私も、全くそのとおりだと思う。北朝鮮は、交渉において今度は約束を守りませんというポーズを取るだろう。だが、北朝鮮は、大量破壊兵器を破棄することは絶対にしないだろうし、「凍

結する」と約束しても、陰で開発を進めるだろう。

米国の北朝鮮との過去の交渉を見ると、米朝交渉人は人が良くて、「我々と交渉している相手（北朝鮮）は、合意を守ってくれる」と思ってしまうようだ。米国は北朝鮮を信頼して、1993年と2005年に2回合意した。そして、米国は合意を守り、北朝鮮は米・韓・日から得るものを得た。しかし、その後で、合意を簡単に反故にしてしまった。米国の公証人には、このことを肝に銘じて交渉して欲しいものだ。

米朝が交渉を模索しているのであれば、過去の交渉から北の交渉戦略を読み取って、今後の北朝鮮との交渉を予測することが必要だ。ここでは、その後の展開についても論じる。

1 テロや拉致を頻繁に行ってきた「ならず者国家」である北朝鮮

北朝鮮は、その長きにわたる軍事挑発の実態を見ると、「ならずもの国家」「テロ国家」そのものだ。



西村金一（にしむら・きんいち）氏

1952年生まれ。第1空挺団、防衛省・自衛隊の情報分析官、自衛隊戦略教官等として勤務。定年後三菱総合研究所研究員、2012年から軍事・情報戦略研究所長（軍事戦略評論家）として独立。

著書に、『自衛隊はISのテロとどう戦うのか』（祥伝社2016年）、『自衛隊は尖閣紛争をどう戦うか』（祥伝社2014年）、『詳解 北朝鮮の実態』（原書房2012年）などがある。

執筆活動（週刊エコノミスト、月刊 HANADA）、テレビ出演（新報道2001、橋下×羽鳥番組、ほんまでっかTV、ひろおび、日経ニュース10）などで活動。

北朝鮮は、朝鮮戦争以降60年以上、韓国や米軍に対して、侵攻には至らないが、地域・海域を限定した潜入行為、小規模な戦闘および大統領を狙ったゲリラ攻撃・テロなど、数々の軍事攻撃・軍事挑発を行ってきた。日本でも多くの日本人を拉致して、北朝鮮に連れ去っていった。

細部にわたり列挙すると、1968～69年には韓国大統領の殺害を狙って韓国大統領府（青瓦台）を襲撃、米国の情報収集艦ブエプロ号を北朝鮮元山沖で捕獲、米国のEC・121電子偵察機を北朝鮮羅先沖で撃墜した。1974年には韓国艦艇を韓国の東海岸沖で撃沈した。1983年には北朝鮮特殊部隊兵士がビルマのラングーンで、韓国大統領を暗殺しようとする爆破事件を起こした。1987年には北朝鮮工作員が大韓航空機をベンガル湾上空で爆破した。1996年には北朝鮮のサンオ級小型潜水艦が韓国東海岸で座礁し、その後乗艦していた特殊部隊兵士が韓国内部に潜入、韓国軍との戦闘になった。1998年には、半潜水艇が済州島沖まで侵入したところを、韓国海軍に撃沈された。

その後は、韓国からの支援ががかりに実施されたこともあり2008年頃まで南北間の関係は穏やかであった。支援が無くなると、2010年には北朝鮮小型潜水艦が魚

雷を発射し、韓国哨戒艇「天安」を沈没させ、さらに韓国延坪島に対して多連装ロケット弾や砲弾を撃ち込み、多数の重軽傷者を出した。今年の2017年には化学兵器のVX剤で、兄の正男氏を人目に付く空港で惨殺した。

以上のように数々のテロやゲリラ攻撃などの軍事挑発を行う国は、この地球上で北朝鮮だけだ。これらの事件の度に、北朝鮮にテロ等の証拠を突きつけると、「韓国の自作自演だ」と言い逃れをするか、沈黙してきた。米国の交渉人は交渉する相手が、テロを頻繁に行ってきた「ならずもの国家」であるという本質を熟知しておくべきだ。

2 北朝鮮の、過去の米朝交渉における戦術

北朝鮮と米国等との交渉経緯をたどってみると、北朝鮮の核開発を巡る交渉パターンと交渉戦略が見える。北朝鮮は、「合意を守ります」と見せかけて、支援をもらい、その後、合意を破ったのはお前達だと主張して、結果的に合意は守られなかった。実際、合意を守らなかったのは北朝鮮で、密かに核兵器と弾道ミサイル開発を進めていたのだ。その結果が、いまのありさまである。

交渉経緯から、北朝鮮のずるがしこい交渉戦略を解説す

る。

ソ連邦崩壊翌年の1992年1月、北朝鮮はNPTに基づきIAEAの核査察を取り決めた保障措置協定に調印。だが、同年5月にIAEAによる査察により核兵器開発の疑惑が持たれた。1993年NPT脱退を宣言し交渉を留保。その間、ノドンミサイルを日本海に発射して強硬姿勢を示し、1994年6月、IAEAから脱退。

北朝鮮が反発姿勢を示し緊張状態に至った。その3日後にカーター元大統領が急遽北朝鮮を訪問して金日成と会談し、「米朝枠組み合意」に至った。その結果、米韓日は軽水炉建設と毎年50万tの重油の支援を行うことになった。北朝鮮は、プルトニウムを製造することができる黒鉛減速炉の稼働を一旦停止し、最終的には解体することを約束した。

北朝鮮は合意から4年後の1998年に、重油や食糧支援を得ていながら、テポドン1ミサイルを発射した。2002年にはウラン濃縮計画の存在を認めた。この間エネルギーや食糧の支援を約7年も得ていたのだ。

北朝鮮は核兵器・弾道ミサイル開発を凍結する姿勢を見せながら、陰では核兵器や弾道ミサイル開発に邁進していたのである。これが、米韓日を騙した1回目の協議の結果

だ。

その後また同じ交渉、合意、破棄が繰り返される。

北朝鮮はウラン濃縮計画を認めた後、寧辺の核施設を再稼働し、2003年にNPTを脱退した。2005年には核兵器の製造を発表した。同年の「共同声明」で、北朝鮮は全ての核兵器及び既存の核計画を放棄し、NPTとIAEA保障措置に早期に復帰することを約束した。米国は攻撃又は侵略を行う意図を有しないことを確認、関係国は北朝鮮との経済協力の約束を表明した。

その後、北朝鮮は2006年にテポドンを含む7発のミサイルを発射、また1回目の地下核実験を実施し、国連安保理は北朝鮮への制裁を決議した。2007年になると話し合いが持たれ六カ国協議の合意文書が発表された。次の段階では、北朝鮮は全ての核計画について完全な申告の提出や全ての既存核施設の無能力化を実施、北朝鮮に対し重油95万t相当の支援を実施することになった。米国はマカオの銀行にある北朝鮮関連資金口座の凍結を解除し、テロ支援国家指定も解除した。その結果、北朝鮮が実行したのは、古くなった寧辺の反射炉を爆破しただけである。

その後、2009年に再び検証手続き文書を巡り決裂した。

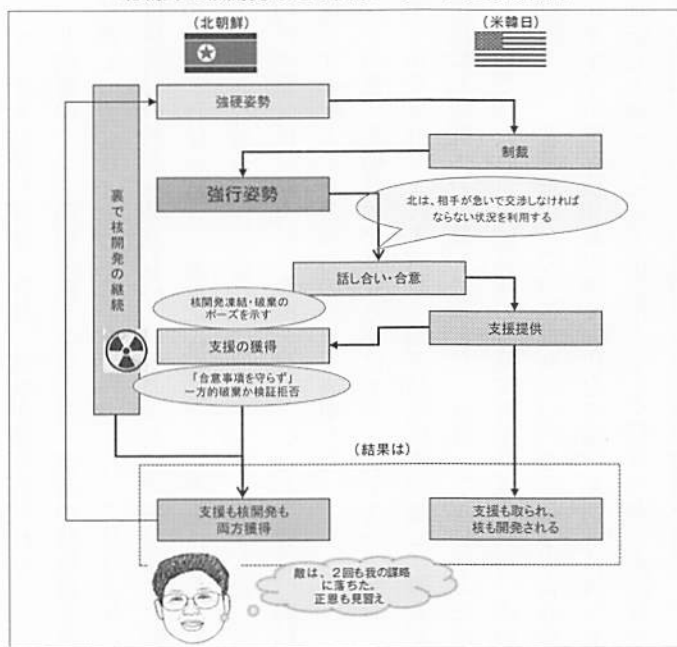
過去2回の米朝交渉を整理すると、北朝鮮の強硬姿勢↓国連等による制裁↓北朝鮮の強硬姿勢↓話し合い(交渉結果が早急に求められる環境が醸成される)↓北朝鮮による開発凍結約束と米韓日による支援↓北朝鮮は約束を実行するふりを見せるだけで実行せず、IAEAに検証をさせない↓検証のことで物別れになる↓頃合いを見計らって陰で核を開発していたことを表し、一時的に止めていた核施設を再稼働させる強硬姿勢に移る。

これが北朝鮮の交渉戦略である。

北朝鮮の交渉戦略は、核兵器やミサイルの開発を見せつけ危機を演出し、危機から戦争への拡大に発展するギリギリのところの「瀬戸際外交」を利用した「うそ、騙しの戦略」と表現したほうがよい。米韓日は、北朝鮮にまんまと騙され北朝鮮が核兵器を作る前にそれを食い止めることはできなかった。

孫子の兵法の始計編に、「兵は詭道なり」という戦略がある。「戦争行為では、敵を欺いて勝つことだ」と言う意味だ。北朝鮮は、孫子の兵法を上手く使って、米韓日をまんまと欺いて、支援と核の二つの望みを得ることができた。我々は、北朝鮮が『兵は詭道なり』という戦略を用いて交渉していることを十分に理解し、これまでの交渉結果を忘

北朝鮮の核開発を巡る交渉パターンと交渉戦術



れてはならない。北朝鮮の核開発を巡る交渉パターンと交渉戦術については、次の図のとおりである。

出典：筆者作成

3 オバマ政権の北朝鮮に対する「戦略的忍耐」

2013年の交渉で、米国が北朝鮮に核兵器放棄の姿勢を貫くと、交渉は進展しなかった。

北朝鮮は同年2月、3回目の核実験以降、核保有を背景に、朝鮮戦争の休戦協定を全面白紙化し、核攻撃でソウルだけでなくワシントンまで火の海にすると軍事的恫喝カードを次々に出した。だが、恫喝のみで実行には移さなかった。

次々に仕掛けた北朝鮮の恫喝の狙いは、「北朝鮮が核を保有することを認めさせたい」ということだった。その前提でアメリカを交渉のテーブルに付かせ、アメリカの譲歩を引き出したい、これまでと同様に支援も得たいということだ。そして、その成果を金正恩の成果として国内に示したかったに違いない。

しかし、この時の恫喝では、北朝鮮は期待した成果を得られなかった。それどころか中国からも具体的な金融制裁を受けた。中国へ特使を差し向けたが、冷淡な対応をとられ、得るものはなかった。北朝鮮に敗北感が残り、金正恩の無策を露呈した形になった。開城工業団地を閉鎖したこ

とも合わせ、自分の首を絞めるとん詰まり状態になった。

2013年以降の米国の交渉姿勢は、過去2回の交渉失敗の轍を踏まないために、「北朝鮮が核開発の放棄に真剣に取り組めば交渉の用意がある」とした態度を貫いた。つまり、北が核を放棄する姿勢を示さない限り、交渉のテーブルには着かない意志を示した。あわせて、北朝鮮の核兵器や弾道ミサイルに対抗するため、米国は、BMDの強化を図る。アラスカやグアムに迎撃ミサイルを配備して、万全の構えをみせた。北朝鮮が更に過激な行動を示せば、北朝鮮に向けて米国のICBM(ミニットマン3)を打ち込む力があることを、実験によってちらつかせもした。この結果、北朝鮮に甘い汁を吸わせなかったが、核兵器とミサイルの開発を最終段階まで進めさせてしまった。

4 合意を守らないと見抜かれている北朝鮮の今の戦略

北朝鮮は、2度の合意事項を反故したことで、とうとう合意を守らないことを見抜かれてしまった。これまでと同じことをやっているのは、成果をあげることではできないと考えたのだろう。だが、その戦略は、大きく舵を切ることは

なく、これまでの延長線上にあるようだ。

北朝鮮は、潜水艦発射弾道ミサイル（レベルはまだ幼稚だが）、中距離弾道ミサイル、米国本土まで届く大陸間弾道弾 ICBM の実験を行い成功させた。特に、7月28日に実施した火星14号の発射実験では、米国本土に届くことを証明した。

8月9日、北朝鮮の弾道ミサイル運用部隊である戦略軍が、「米国の核戦略爆撃機があるアンダーソン空軍基地を含むグアムの主要軍事基地を制圧、けん制し、米国に重大な警告信号を送るため、中長距離弾道ミサイル『火星12』でグアム周辺への包囲射撃を断行する作戦案を検討している」と伝えた。また、「グアム包囲射撃案は、近く最高司令部に報告され、金正恩総司令官が決断を下せば、実行されることになる」と警告した。北朝鮮はまた日本に対して、「日本列島ごときは一瞬で焦土化できる能力を備えて久しい」と威嚇した。

北朝鮮は、これまで、映像や非難で、米韓日を恫喝してきた。米韓日は、北朝鮮の口だけの脅しと判断していたので、真剣に対応する必要はなかった。だが、北朝鮮に開発する時間を与えてしまった結果、核開発や弾道ミサイル開発の最終段階まで到達させてしまった。北朝鮮は、遂に本

当に脅す力をつけてしまった。

これに対処しトランプ大統領は、「グアムで何かあれば、世界が今まで見たこともないようなことが、北朝鮮に起こるだろう。炎と怒りに見舞われる。単なる挑発ではない、声明であり事実だ」と強く警告した。言葉による恫喝だ。

これまでは、北朝鮮が口だけの脅しだった。今は、シリアには巡航ミサイルトマホークを撃ち込んだトランプ大統領の方が、口だけの脅しのように見てとれる。私が、そのように感じるので、北朝鮮も同様の感覚を持っているに違いない。

つまり、北朝鮮は、実現可能な脅しを行って、「瀬戸際外交レベルだった危機を、朝鮮半島から米国本土にまで拡大し、紛争直前のレベルにまで高めた」と言える。その他は何も変わるものがない。よって、この脅しに屈してしまうと、過去の騙された交渉と同じことになる。

5 次の交渉に失敗してもよい米国の最終的なカード

北朝鮮にとって、これまでの交渉は、核開発のための時間かせぎの一手段だった。現在は、核兵器や弾道ミサイル

の保持を認めさせる戦略に変化している。そのため、米朝交渉に成功しようがしまいが、北朝鮮が核兵器を保有していることに変化がないのだから、米朝交渉に失敗してもよい。

交渉に失敗しても、制裁を強めればよい。最終カード「体制崩壊」に、戦略変更するぞと脅せばよい。それはなぜか。北朝鮮は合意しても、それは、核兵器・弾道ミサイル開発の時間稼ぎでしかないし、合意も守らないからだ。

米朝には、少なくとも過去の轍を踏まないでほしい。我々は、解決して欲しいと願う。合意事項を守る気がない国と交渉するのだから、米朝は、「我々が交渉している相手は、今回の交渉の合意は守ってくれる、信頼できる」という幻想を抱かないことだ。合意を守らなかったのは米朝の責任として擦り付ける。北朝鮮はいつも、テロを行って多くの死傷者が出て、「韓国の自作自演だ」としてきた。そんな北朝鮮が、今回だけは合意を守ってくれるとは考えられないし、絶対に考えるべきではない。

例えば、トランプ大統領が、クリントン、ブッシュ、オバマの3人の大統領が成功させられなかったことを、自分が解決させると意気込んでいて、もし、米朝が成功させた

い気持ちを優先させると、北朝鮮の「嘘の誘惑」に負けて、核兵器を放棄するという確証を得ずに合意してしまう可能性がある。北朝鮮との交渉では、成功しなくてもよいというゴールを持っていないと、交渉を有利に進めることができない。

交渉に入れば、その交渉は進展するかどうか。米朝間で合意をまとめることができるのか、平和的な解決ができるのかを分析したい。

そのために、①両国が求めている落地点はどこか、②両国の意思を考察し、合意に達することができるのか、あるいは、決裂するのかを明らかにしたい。もし、平和的な解決ができるとすれば、妥結点はどこにあるのかも考察したい。

(1) 米朝が求めているものは

北朝鮮が求めているものは、①金体制を絶対的に維持すること、②核兵器・弾道ミサイル（米朝に届く）の最終段階の実験を完成させることだ。水爆も想定に入っているかもしれない。その後は、どんなことがあるうとも、核兵器・弾道ミサイルを、絶対に放棄しない。

北朝鮮は、大量破壊兵器の開発を凍結することを条件に、

エネルギー及び食料援助を求め、①国連制裁の解除、②休戦協定から平和協定を締結して、在韓米軍を韓国から撤退させることを求めるだろう。一旦合意したとしても、たとえ国連の監視があるとう見えないうところで、最終段階の開発まで継続するであろう。

米国が求めているものは、北朝鮮が保有する大量破壊兵器を、凍結ではなく、破棄させることだ。北朝鮮は、この要求を受け入れることはないと思う。もし、北朝鮮が受け入れれば、米国は、金体制の維持を保証する。将来的には、国連制裁を解除し、平和協定を締結する。だが、在韓米軍を撤退することはないであろう。

(2) 北朝鮮の軍事力を過大に恐れる必要はない

交渉が決裂すれば、韓国にミサイルや砲弾を、日本へ弾道ミサイルを撃ち込み脅すであろう。だが北朝鮮は、戦争をすれば、敗北することは目に見えている。だからしたくないのだ。

その理由は明白である。北朝鮮は米韓軍と比較して、かなり劣性である。通常戦力では、数的には北朝鮮が韓国軍の約1・4倍で優勢ではあるが、実際に戦える近代兵器の力を比較すると、韓国軍が有利である。これに米軍の戦力

を加えると、米韓軍が圧倒的に有利である。特に海空軍が。地上軍の南侵は、限定的な成功はありえるが、海空軍の支援がなく、総合戦力が足りないことから、韓国を征服することは不可能であろう。現在の戦力比でみると、北朝鮮軍は南北国境線を超えることができても、ソウルを占領することは不可能に近い。北朝鮮の奇襲攻撃が運よく成功したとしても、ソウルの漢江の線までであろう。

北朝鮮の特殊性をあげれば、軍に数百万人の死者が出ても、攻撃続行を強要することができることだ。だが、攻撃が上手く進展せず、ソウルを陥落させられなかった場合や米韓軍のミサイル攻撃によって、平壤の政府の建物、金一族の建物がほとんど破壊された場合には、金一族による支配が一瞬にして崩壊することになる。

おわりに

困難を極める交渉になることが予想される。米朝相互の要求が、すんなり合意に到ることはないであろう。短期的に見れば、交渉決裂の可能性が高い。交渉決裂の鹵軍がエスカレートすると、北朝鮮は、グアム近海にミサイルを撃ち込むと発言し、実行に移すかもしれない。北朝鮮のミサ

イルを、米軍が撃ち落せば、北朝鮮は、韓国に砲弾を撃ち込み、南北間で砲弾の撃ち合いになる可能性がある。

ミサイルをグアム近海に撃ち込まれて、米軍が何もしなければ、北朝鮮は、グアム、次にはハワイ、更にロサンゼルス沖にミサイルを撃ち込み、危機を高める。米国が、北朝鮮の要求を呑むまでは、ミサイルの恫喝は続くだろう。

北朝鮮は絶対に放棄することはないであろうから、その他の解決策を模索することになるであろう。長期的な交渉の結果、妥結点があるとしたら、私は、核兵器・弾道ミサイルを、鎖を付けて身動きできないようにすること。現実的には、中国とロシアの軍が共同管理するという案がある。そして、現段階以上の開発は行わない、凍結するというものであろう。

このような妥協案がまたらなければ、米朝はいずれ斬首作戦が発動され、米朝紛争に突入することになるだろう。

